

埼玉経済



やまぐち・しゅうち 1968年生まれ。東京大学大学院理学系研究科修士課程修了。博士(理学)。東京大学大学院総合文化研究科(助手)、理化学研究所(専任研究員)などを経て、2014年4月から現職。専門はレーザー分光による物理化学。

サイ・テク 知と技の発信

[222]

埼玉大学・理工学研究科の現場

■大きな騒動

昨年、STAP細胞の研究不正が大きな騒動になりました。その騒動から、はつきりと分かったことがあります。それは、容の面白さを手放して賞賛して正しくない科学であっても人はあれほど面白がることのできる、ということです。

成果発表から不正が疑われ始めるまでの間、専門家から門外漢まで、ほとんどの人が研究内

科学の面白さと正しさ

山口祥一 大学院理工学研究科 教授

を決める最も重要なファクターと考えられています。

「あなたの研究はとも面白くない」と言われて喜ばない研究者はいません。逆に、「正しいが面白くない研究」は研究者にとって侮辱の言葉とされています。そして、あの騒動を経ても科学の「面白さ至上主義」は微動だにしています。

科学としての正しさは当然の前提条件であって、面白さや、それに加えて新規性、有用性を追求することが科学研究の営みであり続けています。

■広い裾野が必要
しかし、単なる前提の当たり前のものとして扱えるほど、科学的に「正しい」ということは簡単なものではありません。

実際に、騒動の渦中には、世界的に著名な超一流と言われる

科学者が複数いました。超一流であるにもかかわらず、研究内容が正しくないということを事前に見抜くことはできませんでした。

一方で、不正の発見に主要な貢献をしたのは、当該分野とその周辺の多数の研究者や関係者でした。そのような方々のほとんどは、おそらく超一流とは呼ばれていない普通のひと予想されます。このことは大変示唆に富んでいます。

科学的な正しさを保つのに必要なのは、少数の超一流研究者ではなく、多数の普通のひと々です。正しいかどうかを見極めるには、頂にいる天才数人よりも、裾野の凡人数万人の方がはるかに有効です。頂をより高く、真理により近づけるためには、広い裾野が必要なのです。

■真理を愚直に追求
これまで積み上げられてきたものが正しいならば、正しくないものが新しく面白いとされて持て囃(はや)されること

稀(まれ)に起こるのは致し方ないことでしょうか。ただ正しいだけのものが、当たり前のように見られるもの、あるいは意味当(あ)然のことです。

しかし、正しいかどうか、と

いことは決して蔑(あ)ないがしろにされてはいけません。面白

いかどうか役に立つかどうか、新しいかどうか、すごいかどうか、といったことだけに過剰に重きを置いた研究の成果は、短命に終わるに違いありません。真理を愚直に追求する多数の普通の研究者が、正しい科学を生き残らせてその発展を支えています。

企業、団体、商店街などの話題や情報をお寄せください
TEL 048・7995・9161 FAX 048・653・9040
ikeizai@saitama-np.co.jp